

ようこそ畑へ

2011年10月11日(火)・13日(木)

【愛子】

“不思議だよね～。”畑と隣接するファミリー農園を借りている友人(会員さんでもあります)との会話です。何が不思議かということ、先週のお便りで「弱い霜が降りました。」と書きましたが、あの後も、早朝は弱い霜が降りて、しそやミニトマトやズッキーニなどの夏野菜はすべて枯れてしまいました。霜が降りる前までは、夏野菜も、白菜や人参なども同じように青々としていたのに、霜を境に枯れてしまうもの、まだ元気なもの不思議と別れてしまうのです。白菜や大根は霜が降りるような寒さに合うと、甘みが増してきます。もちろん、強い霜がくると白菜などもしばれてしまうので、その前に収穫しなければなりません。

また、黒豆、大豆、青大豆と三週に渡って、枝豆をお届けしました。先日、その後の黒豆の様子を見てみました。さやを開けてみると、赤く変化していました。大豆も緑から黄色くなってきました。赤花豆、白花豆、前川金時も収穫の時を迎えています。年内には販売できるように、乾燥、脱穀などの作業を進めていきたいと思います。



【固定種と交配種の話】

野菜には、伝統的に種採りを繰り返して品種として確立された「固定種」と、異なる品種を掛け合わせた雑種の1代目である「交配種」があります。交配種はF1（エフ・ワン）とも呼ばれます。伊達家のトマト「世界一」は固定種で、有名な「桃太郎」は交配種です。今、野菜の大半は交配種で、固定種を作る農家はあまりいません。

交配種を作る技術は野菜によって違うのですが、年代が進むにつれ、自然の営みとはかけ離れた方向に動いています。このことを皆さんにお伝えしたいのですが、少し込み入った話で長くなるので、3回に渡って書いてきます。

まず、ごく基本的なことですが、野菜は雌しべに雄しべから出る

花粉が受粉することによって種ができます。固定種では同じ品種同士で受粉してできた種を採っていきます。一方、交配種は異なる品種を受粉させて作りだされます。

最初に登場した交配種作りの技術は、人間の手で、雄しべの花粉を雌しべにつける方法です。

かぼちゃやズッキーニのように、雄花と雌花が別々に咲く花は比較的手間がかかりませんが、トマトやナスのように一つの花に雄しべと雌しべがあるものは大変です。二つの品種を育てて、花がついてきたらつぼみのうちに一方の品種からは全て雄しべを取り除いていきます。そこに別の品種の雄しべの花粉をつけます。ピンセットを使ったとても細かい作業です。花は次々と咲いていきますから、膨大な手間と人件費がかかる作業なのだそうです。こうして採れた種が交配種と言われるものです。ウリ科（かぼちゃ、ズッキーニ、きゅうりなど）やナス科（トマト、ナス、ピーマンなど）は一度の受粉でたくさんの種が採れるのでいいのですが、アブラナ科（大根、小松菜、キャベツなど）は一度の受粉で採れる種が少なく、それだけ受粉作業をたくさんしなければならないので、もっと効率的な方法が編み出されました。（つづく）

【人参】

札幌太人参という品種です。今週は葉をつけてお届けする予定です。届いたらすぐに葉をはずして保存してください。葉の軸の部分は硬いですが、葉の部分はかき揚げ（写真）にするとパリパリと食べられておいしいです。



また、みじん切りにしてお好み焼きや餃子に入れたりします。